社団法人　日本図書館協会　図書館学教育部会

会　　報　第３号

昭和 51 年 10 月 20 日発行　編集・発行　図書館学教育部会

全国図書館大会第５分科会の案内

本年度全国図書館大会は，来る11月26～27日，東京でおこなわれるが，第５分科会（「望まれる図書館員」）が第２日目の27日14時～17時の間，一橋大学一橋講堂においておこなわれる。この分科会の構成と運営については，主として，当図書館学教育部会がこれに当たることになり，細部については幹事会が中心となって準備をすすめているが，その目的と運営方法のあらましはつぎのとおりである。

図書館員について，各館種の立場から現状の諸問題を提起し，理想の図書館員像とは何かを考え，この理想像へ近づく各種の方策を探究する。図書館員の資質の問題，教育の問題，各種制度上の問題，管理者側からの問題，職場環境からの問題，利用者側からの問題等が考えられる。討議はパネル・ディスカッションの方式でパネル・メンバーは，養成機関および公共・大学・学校・専門図書館の各館種から１名ずつ出席して頂く予定である。部会員皆さん多数の参加を期待したい。

昭和51年度図書館学教育研究集会の開催

本教育部会では，富士吉田市の人材開発センター富士研修所において，35名の部会員の参加を得て，８月22日から24日まで，第８回図書館学教育研究集会を開催した。

第１日は，16時30分から開会し，開会の挨拶に引続き，裏田武夫部会長による「図書館学研究における哲学の復権」と題する講演が行なわれた。技術偏重思考に陥りやすい図書館学研究において，単なる技術的知識ではなく，今こそ合理的な認識に基づく科学性を追求すべき時期にあることが強調され，参加者は反省のよすがを与えられた。

第２日の午前は，大学基準協会図書館学教育基準分科会によって作成された「図書館情報学教育基準（案）」について，沢本孝久分科会委員長の説明があり，これに基づいて質疑応答，意見の発表が行なわれた。これは大学レベルの図書館学部ないし学部レベルの図書館学科を開設する場合の基準案であり，参加者の関心が強く，予定を変更して，午后も引続いて同案の討議をすることになった。

質疑において，最も異議が集中したのは，「図書館情報学」の名称についてであった。また専門科目の４部門の名称，(1)基礎部門，(2)メディア・利用部門，(3)情報処理部門，(4)情報システム管理部門についても，内容を的確に表わすものではないという批判が多かった。さらに例示科目についても適切さを欠くという意見があった。全体として情報学への傾斜が強すぎ，伝統的な図書館学教育の色

日本図書館協会
資料室

彩が稀薄であるとする参加者が多かった。

第3日は，「カリキュラム編成にかかわる諸問題」というテーマのもとに，後藤純郎，高宮秀夫，黒木努の三氏による事例発表と質疑応答が行なわれた。まず，後藤氏は日本大学文理学部における職業課程科目中の司書課程の現状について説明され，関連科目の選択の余地が大きいことの利点を指摘された。つぎに，高宮氏は早稲田大学教育学部に随意科目として図書館学関係科目が開講されているが，専任教員のいないことの問題点を明らかにされた。さらに，黒木氏からは図書館短期大学におけるレファレンス科目に関する幾つかの問題提起がなされた。カリキュラム設計上の問題，レファレンス科目の内容，他の学科目とくに情報検索との関連，などである。

事例発表について質疑応答，補足説明をしたのち，教育部会への要望を求めたところ，図書館学科目における必読文献のリーディングスの編集，所属大学図書館と図書館学担当教員との関係の調査，現職者と教育者とのアプローチの計画などが提案された。

正午，裏田部会長による閉会の挨拶をもって本研究集会を終了した。

参加者一覧（申込順）

裏田武夫（東京大）	前園主計（青山女子短大）	長沢雅男（東京大）
梶井重雄（北陸学院短大）	浜崎邦子（大阪樟蔭女子大）	今まど子（独協大）
伊東正勝（国士館大）	弥吉光長（国学院大）	石塚正成（図書館短大）
古賀節子（青山学院大）	和田弘名（帝塚山短大）	朝比奈大作（横浜市立大）
高橋重臣（天理大）	北条正韶（富山女子短大）	平野英俊（東京大学大学院）
宮田平三（金蘭短大）	伊藤松彦（鹿児島短大）	中森　強（国会図書館）
青木次彦（同志社大）	高宮秀夫（早稲田大）	向井　晃（東海大）
石塚栄二（帝塚山大）	中沢　保（早稲田大）	黒木　努（図書館短大）
中嶋正夫（大谷女子大）	竹内　悊（専修大）	志村尚夫（図書館短大）
沢本孝久（慶応大）	浜田敏郎（慶応大）	小山郁子（共立女子大）
細野公男（慶応大）	安西郁夫（慶応大）	小川俊彦（日本図書館協会）
菊地真一（常磐学園短大）	後藤純郎（日本大）	

研究集会参加者の声

研究集会に参加して

安西郁夫（慶応義塾大学）

図書館学教育部会の昭和51年度研究集会は，広大な庭園の正面に霊峰富士を望見し，都会の騒音から遮断された人材開発センター富士研修所で開催された。静かな環境と快適な設備の中で3日間にわたり共通のテーマについて話しあえたことは大変有意義であったように思う。

しかしながら，中心課題であった「図書館情報学教育基準案」をめぐる議論は，ある意味では非常にホットではあったが，必ずしもうまく嚙みあっていたとはいえないように思う。共通の領域を論じあうとはいえ，博士課程の担当者から短大課程の担当者までが混在している集会では，各参加者のインタレストの所在が異なり，議論がすれちがうのは当然といえば当然であろう。

研究集会で展開された議論を傾聴して痛感したことは，わが国の図書館学が今曲り角に立たされており，教育関係者は大きな不安と戸惑いを抱いているということである。このような転換期や流動の時代には意見の完全一致などはありえようがないし，またしいてそ

れを求めるべきでもないように思う。各大学がそれぞれの信ずる所に従って特色のある教育を展開すればよい。したがって，教育基準なるものは，そのような自由な展開をさまたげないフレキシビリティーを持つものであればよいのではなかろうか。

俗に「海のものとも山のものとも」という言葉があるが，ある者は山を目指し，ある者は海に足を向けても，それはそれでよいではないか――というのが偽らざる感想である。

来年度以降も引続き研究集会を実施するのであれば，ぜひ富士研修所のような会場を選んで頂きたいと思う。

新らしい「教育基準(案)」をめぐって

石塚正成（図書館短期大学）

図書館学教育部会の第8回研究集会における，「図書館情報学教育基準(案)」の討論に参加したひとりとして，私の率直な印象と意見の一端を述べさせていただく。

○

第1に，新基準案は現行基準（昭和29）の部分的修正にとどまらず，その抜本的な“策定”が意図されていることである。すなわち，その基本的態度は，

伝統的図書館学＋情報学（内実は，そのセグメントとしてのドクメンテーション）ではなく，

情報学＞伝統的図書館学≒図書館情報学

の図式におかれていることは明らかである。

したがって，その見出し語が「図書館学」から「図書館情報学」に変えられ，専門科目の部門の名称が“基礎部門”を除いて3部門とも目新しいコトバに置き換えられている。中でも見出し語と(2)メディア・利用部門については，発言者の大多数から反対ないし要再考の意見が開陳された点は銘記しておきたい。

第2には，ネーミングの問題にも関連するが，部門の分担範囲の区別が適切であるかどうか，例示科目名がその内容を明確に示していないのではないかが問題になった。前者については，「解説」でもふれているように必らず4部門に限定しなければならないという根拠は薄弱であり，「実施方法について(案)」に“専攻科目の各部門ごとに最少限度1名の専任教員を置き”という文言と5名以上は困難であろうという現実的配慮に基づくという沢本氏の回答であったと記憶する。部門が4以上であってもよいならば，研究集会でも指摘があったように，利用者に対するサービス部門の設置が考えられてもよいのでないか。後者についても，例えば(3)の情報処理部門では，“情報処理論”という概括的な名称の科目がおかれているが，その具体的内容はただちに理解しにくい。ここでは従来の目録法・分類法，索引法……，または“資料組織法”などのわかり易い科目名を使う方が妥当であろう。

第3には，結論的にいえば，新基準案についての当該分科会の積極的姿勢と努力を評価するに吝（やぶさか）ではないが，もう少しの現実直視と漸進的改革への軌道修正を期待してやまない。理由は，現行基準策定後20数年を閲しながら，基準に該当するのは，いまだに3大学に過ぎないことである。学部・学科の増設とドクメンテーション関係科目の適切な導入等による教科内容の刷新と充実に今しばらく専念し，しかるのち教育研究界はもとより，図書館界一般の支持と理解のもとに“より実現性”に富んだ基準が産まれることを切望するからである。

研究集会に参加して

竹内　悊（専修大学）

富士の裾野での三日間は，ふだん出不精のわたくしに，いろいろな刺激を与えてくれました。企画・運営に当られた皆さんに，先ずお礼を申しあげます。

「図書館学における哲学の復権」という講演を聞いて，ともすれば「図書館」という神殿のための神学・宗学に安住してしまいそう

な日常の授業を思いかえしました。図書館学に携わるということは，図書館の否定と肯定との間の鋭い刃の上を渡るようなものだと思いますし，渡った先にあらわれる図書館像は，一人一人の独自のもの。それを突破して更に進まなければ，共通の広場には到達しないのです。全く，遠い遠い道程だ，という気がしました。

ところが，図書館員の養成は，その遠い先に行き着いてからの仕事ではなくて，今日只今の仕事です。しかもそれは，一人一人の独自の考えや方法を主張する場というよりも，公開図書館にかかわるすべての人々のコンセンサスの上に成立つものと思います。多様性や先見性は，その基礎の上にこそ立つものではないでしょうか。

遠い先を見つめて，ひとりで進まなければならない仕事と館界のコンセンサスの上に成立つ仕事との両方を背負って行かなければならないのは大変だな，と，富士を眺めながら考えて居ましたが，ふと気になったことがあります。図書館学の教師は，館界から，将来の図書館員の養成を委任されているのでしょうか，それとも，大学の教師だから授業をしているのでしょうか。

夜，富士の山腹にちらちらしていた登山者のあかりが，とても印象的でした。動かないように見えて，一歩一歩登っているのでしょう。それと共に「実地の経験を通して帰納される〔図書館学の〕理論が，一日も早く生まれるべきである」という有山崧氏の文章が，それから25年たった今，たいへん鮮明に思い浮んだことでした。

昭和51年度ＪＬＡ教育部会研究集会に参加して

浜崎邦子（大阪樟蔭女子大学）

４年ぶりに研究集会に参加してまず驚いたことは，参加者の顔ぶれが半数近く変わっていることでした。しかしこれは私にとって，多くの方々との新しい出会いという意味でうれしいことでもありました。

つぎに会場のことですが，ミニゴルフ場を想わせる芝生の広い庭を隔てて，くっきり浮び上るような美しい富士山の姿を一日中眺めることのできる会場は，すこぶる快適で，これまでの，といっても２～３回の数少い参加経験ですが，どの会場よりもよかったように思います。その上幹事の方々のこまやかな心づかいがゆきとどいて，とても和やかな雰囲気のたのしい会でありました。ここにあらためて幹事の方々および協会事務局の方に厚くお礼申し上げます。

さて，研究集会の内容ですが，第１日目の裏田氏の講演「図書館学研究における哲学の復権」は，私も日頃考えていたことですので大変興味深く拝聴しました。第２日目の「図書館情報学教育基準(案)」については，重大な問題ですので，予定を変更して一日を費したのは当然でしたが，事前に資料を配布しておくとか，あるいは地域毎の集会等で十分に検討した上で研究集会にのぞむなどの方法がとられていたら，もっと活発な意見が交され，実りあるものになったのではないでしょうか。この基準(案)の内容を今回の集会ではじめて知らされた者が多く，また，説明者側の基準協会メンバーの意見調整も十分ではなかったようで，参加者が混迷させられる一面もありました。３日目の『カリキュラム編成上の諸問題』についての事例発表は，私自身大変期待していたのですが，時間が短縮されました関係上十分に拝聴できなかったのが残念に思いました。次回にもう一度このテーマをとりあげてくださるよう希望いたします。

今後は，この会をもっと有意義あらしめるためにも，協議事項に関する資料は事前に配布されるよう，さらに研究発表，事例報告等においてもできるだけ資料の準備をしていただくよう，ご配慮願えれば有難く存じます。

図書館情報学教育基準（案）について

本会報第２号でもお知らせしたように，大学基準協会では，目下昭和29年に決定した「図書館学教育基準」の改訂作業を進めているが，その作業もいよいよ大詰に近づき，案がまとまった。この案の内容については，去る８月22～24日，富士吉田市の人材開発センター富士研修所でおこなわれた第８回図書館学教育研究集会でも発表され，質疑・討論がおこなわれたが，部会員の御参考に供するため，紹介をしておく。

図書館情報学教育基準（案）

一、目的

図書館情報学教育は，図書館情報学に関する学理および技術を教授し，あわせてその応用能力を展開させることを目的とする。

二、授業科目およびその単位数

専門教育科目は，専攻科目と関連科目に分ける。

1. 専攻科目

ア．専攻科目は，これを左の四部門に分ける。

(1) 基礎部門（６単位以上）必要に応じ，演習をおこなうものとする。（図書館情報学概論，図書館思想史，学術発達と図書館，情報要求調査等）

(2) メディア・利用部門（８単位以上）必ず実験または演習をおこなうものとする。（情報メディア論，参考調査資料論，参考調査演習等）

(3) 情報処理部門（８単位以上）必ず実験または演習をおこなうものとする。（情報処理論，情報処理演習，情報流通技術論等）

(4) 情報システム管理部門（８単位以上）必ず実験または演習をおこなうものとする。（情報システム論，情報システム演習，情報システム管理，情報システム管理演習，図書館機械化論等）

イ．右の他に図書館情報学実習（２単位以上）は必ずおこなうものとする。

ウ．専攻科目は実習を含め，各部門を通じて合計38単位以上履修しなければならない。

2. 関連科目

ア．関連科目は，広く人文・社会・自然・応用科学の諸科目から選択して設定する。

イ．とくに，図書館情報学の学際的性格にかんがみ，数学・言語学・論理学・哲学・生理学・心理学・教育学・社会学・経営学・情報工学等を開設専攻科目と関連させながら設定する。

三、その他

その他の事項に関しては，大学基準および大学設置基準によるものとする。

備考　本基準は，図書館情報学部における教育基準であるが，大学の学部において，図書館情報学科を設ける場合も本基準によるものとする。

図書館情報学教育の実施方法について（案）

図書館情報学の教育に関しては，左のような事項に留意して実施することが望ましい。

一、専攻科目担当の専任教員数*

専攻科目の各部門ごとに最少限１名の専任教員を置き，その他適当数の助手を置くものとする。

二、授業方法

授業は，講義・実験・演習および実習のいずれかにより，またはこれらの併用によりおこなうものとする。

三、施設設備等

教育研究に不可欠な図書・雑誌・その他の資料および施設設備を用意し，またそれに必要な機器材を備えるものとする。

図書館学教育部会総会開催される

去る5月21日，日本図書館協会図書館において，図書館学教育部会の総会が開かれました。この議事録は，図書館雑誌8月号に掲載されましたので，既にご承知のことと思いますが，ここにその要旨と若干の補足事項を収録しました。

当日の出席者は次の各氏です。（50音順・敬称略）

石塚正成（図書館短期大学），裏田武夫（東京大学），北嶋武彦（東京学芸大学），古賀節子（青山学院大学），今まど子（独協大学）塩見昇（大阪教育大学），渋谷嘉彦（相模女子大学），菅原春雄（立正女子短期大学），竹内悊（専修大学），長沢雅男（東京大学）中森強（国立国会図書館），浜田敏郎（慶応義塾大学），深川恒喜（武蔵野女子大学），前島重方（国学院大学），山崎武雄（東海大学）

以上15名，委任状は35名でした。

はじめに，裏田新部会長より就任のあいさつがあり，その中で任期は，前部会長の残任期間であることが述べられました。次いで，塩見氏を議長に選出し，議事に入りました。

1. 前島選挙管理委員長より，部会長選挙の経過報告がなされ，承認されました。

2. 昭和50年度の事業報告，同決算報告，同監査報告がなされ，承認されました。（議事録参照）

3. 昭和51年度の事業計画について，部会長より説明があり，審議の結果，以下のことが承認されました。

イ．全国図書館大会について，本年度は独自の部会を開かない。

ロ．第8回研究集会について，大学基準協会の「図書館学教育基準改訂版」の検討をテーマとして，8月末に2泊3日の予定で開催する。

ハ．テキストの編集および発行について，今後検討するが，既に出版されているものとは別の性格のもの，たとえば資料集のようなものという意見が出されました。

ニ．図書館利用教育委員会について，深川同委員会委員長より，経過報告がなされ，特に，指導要領が改訂されようとしているにあたって，図書館利用指導の部分が一層充実したものになるように働きかける必要があるとの発言がありました。

ホ．図書館学教育全国計画について，アメリカのNational Commissionの図書館学教育に関するリポートをたたき台にして検討すること，司書課程を終了した学生の図書館への就職状況を調査すること等が論議されました。

4. 昭和51年度予算について，以下の予算案が承認されました。

収入の部

協会交付金	50,000円
会　費	100,000円
繰越金	13,725円
合　計	163,725円

支出の部

会合費	60,000円
印刷費	60,000円
通信費	20,000円
消耗品費	3,000円
予備費	20,725円
合　計	163,725円

以　上

文献紹介

Churchwell, C. D. *The shaping of American library education*. A. L. A., 1975. 130 p. (ACRL publications in librarianship no. 36) $ 8.50

本書は，1919～36年すなわち第一次大戦後から第二次大戦までの20年間に起きたアメリカの図書館学教育の変化を研究したものである。それまでの養成は大学の図書館学校，師範学校，夏期講習，大公共図書館が行なう講習など数も種類も多く雑多なものであった。しかし，この間にウィリアムソン報告その他館界からの批判を受けて，次第に大学の図書館学校での養成に絞られるようになり，図書館学校を認定する制度ができ，基準が1925年に出て1933年に改訂され，教科書の発行，シカゴ大学に博士課程が置かれるなど専門職としての図書館員養成の方向が固まった重要な時期なのである。このような方向を示し，そのリーダーシップをとった臨時養成委員会，それを引き継いだA.L.A. 教育部会，10年に及ぶカーネギー財団の援助，アメリカ図書館学校協会の意義と果した役割に焦点を当てて論じられている。もとは博士論文として書かれたものである。 (M. K.)

文献紹介

The administrative aspects of education for librarianship: a symposium. Ed. by M. B. Cassata and H. L. Totten. Scarecrow, 1975. 407p. $ 14.50

図書館学教育を行なう上で当面する問題を，1. 基準(1972) 2. 図書館教育のゴールと目的，3. カリキュラム 4. 教員 5. 学生 6. 運営・管理，財政 7. 施設・設備 8. 図書館学校認定のため訪問の8部に分け，プロローグに図書館教育の歴史，エピローグに図書館教育の在り方を付し，各分野の専門家の筆になる24の論文が納められている。2. 図書館教育のゴールと目的の部には，大学院レベルでの教育の目的と考え方，大学院レベルの教育におけるプロフェッショナル・スクール（図書館学）の位置，学部レベルの図書館教育，修士課程，上級修了課程（ポスト・マスター・コース等），博士課程の分化，図書館員の生涯教育に大学の果す役割，図書館関係の団体が図書館教育に及ぼす影響といった論文が含まれている。アメリカ図書館学教育の現状や問題点，関係者の考え方が浮き彫りにされ，書名が示すよりずっと幅広い有益な論文集といえる。附録として「図書館学校認定基準1972」が巻末に付されている。

(M. K.)

会員消息

原田　勝氏ユネスコへ

部会員原田勝氏（東京大学教育学部）は，このほどユネスコのユニシスト・プログラム・スペシァリストとして，ユネスコへ赴任された。

渡辺信一氏帰国

部会員渡辺信一氏（同志社大学）は，去る2月からミシガン大学図書館のビブリオグラファーとして在米中であったが，このほど無事帰国された。

沢本孝久氏ＦＩＤの会議に出席

部会員沢本孝久氏（慶応義塾大学）は，去る9月下旬の2週間にわたり，ＦＩＤ主催の教育に関するセミナー，同総会，世界会議などに出席，このほど無事帰国された。

新部会員紹介

このたび，つぎの方々が当図書館学教育部会に加入されましたので御紹介致します（敬称略）

朝日奈　大　作　（横浜市立大学）
伊　藤　松　彦　（鹿児島短期大学）
岩　猿　敏　生　（関西大学）
遠　藤　英　三　（常葉女子短期大学）
小　山　郁　子　（共立女子大学）
菅　　郷　子　（ノートルダム女子大学）
菅　原　　通　（早稲田大学教育学部）
工　　一　夫
戸　田　光　昭　（日産自動車調査部）
中　島　正　夫　（大谷女子大学）
平　野　英　俊　（東京大学教育学部）
前　園　主　計　（青山学院女子短期大学）
山　田　恵　子　（高千穂商科大学）
和　田　弘　名　（帝塚山短期大学）

幹　事　会　記　録

1976年4月24日
出席者：北島，浜田，長沢，今
部会長は海外出張中のため，北島幹事が常務理事会に出席し，その報告があった。
会報2号の編集会議が前回に引き続いて行なわれ，総会前に発行の予定がたった。
総会のための部会報告作成は北島幹事，決算報告書は浜田幹事の担当が決まった。

1976年5月15日
出席者：裏田，北島，浜田，高橋，長沢，今，深川（監事）
総会のためのプログラム作成。および図書館利用指導委員会の経過について深川委員長より説明があり，従来の委員会を一応解散し，秋に文部省が指導要領を発表する時期に合わせて再発足することが提案された。
会報2号発送

1976年7月20日
出席者：裏田，浜田，長沢，今
本年度の図書館協会の年次大会で「望まれる図書館員」と題するパネルが行なわれることになり，本部会が，準備することになった。部会長の外に浜田幹事が大会準備委員会への連絡員に決まった。
研究集会（長沢幹事担当）の日程とプログラム，配布資料等の打合わせがなされた。

1976年9月27日
出席者：裏田，北島，浜田，長沢，今
全国図書館大会のプログラムの検討。
会報3号の編集会議。

昭和51年度会費受領について

本会報第2号で昭和50年・51年度の会費納入方についておねがいしましたところ，早速多数の部会員の方々から納入して頂きました。本来ならば一々領収書をお送りすべきところですが，諸般の事情で会報紙上にお名前を記し，領収書に代えさせて頂きましたのでよろしく御了承下さい。なお，この会報発行後に納入された方については次号でお知らせ致します。もし，万一記載もれなどの不行届きがありましたら，御遠慮なくお申出下さい。御協力ありがとう存じました。

昭和51年度部会費納入者（敬称略）

青木次彦　青野伊豫児　浅野十糸子　朝日奈大作　安部竺巳　安西郁夫　安蒜英雄　石川徹也　石黒宗吉　石塚栄二　石塚正成　和泉田正宏　伊東正勝　伊藤数美　伊藤順　伊藤松彦　植村清　裏田武夫　岡田温　小倉親雄　男沢淳　小野賢吉　小野則秋　梶井重雄　加納正巳　神本光吉　亀田弘　菊地真一　貴田春男　北嶋武彦　木田橋喜代慎　吉川専心　木野主計　木原通夫　草野正名　久保輝巳　古賀節子　後藤純郎　小林宏　小林胖　今圓子　西藤寿太郎　斎藤毅　佐伯登志子　桜井宣隆　佐野大和　沢本孝久　塩見昇　渋谷嘉彦　志村尚夫　進昌三　神野清秀　菅原春雄　高橋和子　高橋重臣　高宮秀夫　竹内悉　武田元次郎　多田二郎　団野弘之　津田良成　友野玲子　中沢保　長沢雅男　中嶋正夫　中村初雄　中森強　埜上衛　浜崎邦子　浜田敏郎　林収正　原田勝　平井祥雲　平賀増美　平野英俊　福島康子　藤原茂　北条正韶　細野公男　前島重方　前園主計　松村多美子　宮内美智子　宮田平三　宮地見記夫　向井晃　村田修身　室伏武　森耕一　弥永専一　山崎武雄　山下栄　弥吉光長　横山孝次郎　吉井良顕　和田吉人　渡辺信一　渡辺正亥　岩猿敏生　遠藤英三　菅郷子　工一夫　小山郁子　菅原通　戸田光昭　山田恵子

なお，まだ部会費未納の方は，至急納入下さるようおねがい致します。

❀❀❀　編　集　記　後　❀❀❀

秋もようやく深まりを見せてきましたが，部会員の皆さんにはお元気にてお過しのことと存じます。会報第3号は，去る8月下旬，富士吉田市の人材開発センター富士研修所でおこなわれた第8回図書館学教育研究集会の記事とこの研究集会に参加された4氏の感想などを中心として編集しました。この研究集会の今後の在り方について，御意見をお寄せ下さい。

なお，御多用のところ，研究集会についての感想をお送り頂いた安西・石塚・竹内・浜崎の4氏に厚くお礼申し上げます。

11月には全国図書館大会で図書館員養成の問題が論じられ，また，おなじく，日本図書館学会の研究大会もおこなわれますが，各地の部会員の方々からさまざまなニュースが寄せられることを期待します。

（き）

図書館学教授要目

図書館学教育の理念と，図書館学の教育体系の確立を目ざし大学における図書館学教育の一応の標準を示した。

図書館学概論・図書館史・図書館資料論・逐次刊行物・図書館資料組識論・情報検索・図書館奉仕論・参考業務・読書指導・図書館経営論

日本図書館協会
図書館学教育部会
図書館学教授要目作成委員会

B 5 判
82頁
¥ 1,000

図書館学教育担当者名簿

日本図書館協会

Ⅰ　大学における図書館学教育実施状況一覧（大学別・地域別開講状況／大学別・開講単位別開講状況／資格取得可能大学の状況／職名別担当教員数延人数／年令別担当教員数実数

Ⅱ　大学別開設状況

Ⅲ　図書館学開設大学一覧

Ⅳ　図書館学教育担当者名簿（五十音順）

B 5 判
114 P
定価 2,500 円